

マ  
ン  
ド  
リ  
ン  
音  
樂  
小  
史

マンドリンは之が完成されて以來日尙淺いのであるから其音樂史はギター音樂史に見る如き變遷はない。私は之を過渡期と完成後の現代との二つに分つ。過渡期は序編であり、完成後の現代は即ち本編である。

マンドリン音樂史に於て特に注意をして置き度いのは吾々はムニエル、クリストファロの時代を所謂黄金期と稱へて居るが事實はギター史に於ける黄金期とは全く性質を異にして居る事である。即ちムニエルの時代は勃興の初期であつて今日は勃興の第二期であると云ふ事である。マンドリン音樂は未だ眞の黄金期を迎へて居ない。若し嚴格に云ふならば今日も尙過渡期であると云ふ事が出来やう。

#### 序編 過 渡 期

マンドリンがマンドウラから新に生れたのは十七世紀の初めである。(「マンドリンギターの樂器としての史的考察」參照)然し當時のマンドリンは勿論今日のナポリ

風マンドリンの如きものではなかつたのである。桿は極端に短く、ペグはヴァイオリンのそれに見るが如き木製のもので且絃はガットを主としたのである。然し十七世紀に於てはマンドリン奏者として知られたものが殆んどない。それはリウート屬の他の樂器が用ひられマンドリンは獨立して奏せられる程進歩して居なかつたからである。ストロベル・ヴァレンティン (Srobel Valentin) と云ふ人は十七世紀の中頃ストラスブルグに住んだリウタイスト、マンドリニスト及作曲家で千六百五十年頃「三つのリウートと一つのマンドリンを用ふる第二のシムフォニー」を書いたが此人などは兎も角もマンドリン奏者として記録に残つて居る唯一の人であらう。

十八世紀に於てはマンドリンが種々な形と成つて現はれた。ミラノ風(ロンバルド風)ナポリ風、フィレンツエ風、ローマ風、クレモナ風などと云はれる。之は地方地方によつて絃數なり形狀なりが多少異つて居た事を示すものであるが樂器としての可能性から觀察すれば孰れも大同小異で狭い力しかもつて居なかつたのである。

十八世紀の初、佛蘭西ブワアンス地方に生れたピエール・デニス (Pierre Denis) 又は Denies とも書く。)と云ふ人はマンドリニスト、マンドリン教師として知られ「マンドリン用の四つのアリア集」を千七百四十七年に出版し、又千七百九十二年には巴里でマンドリン教則本を出版した。蓋しマンドリン教則本としては最も早いもの一つである。千七百八十年頃には此人はサン・シールの女子神學院に音樂教師として勤務して居たと云はれる。

ドメニコ・デルラ・マリア (Domenico Della Maria) は千七百六十八年佛蘭西マルセイユに生れたマンドリニストで又劇曲の作曲家であつた。千八百年には巴里に居住した事が記録に残つて居る。此人は其姓名から判斷すれば伊太利人であるらしく思はれる。

レオオーヌ (Leone) は十八世紀後半期に巴里に居住したヴァイオリニスト兼マンド

リニストで「ヴァイオリン又はマンドリンの分解的教則本」なるものを千七百七十年に巴里で公にした。此教則本は年代から云へばデニスのそれよりも二十二年の昔に出版されたわけであるがヴァイオリン又はマンドリン用の教則本である以上、其内容にデニスの方が獨創的價値が多い様に思はれる。

ジョヴァンニ・チフォレッツァイ(Giovanni Cifolletti)は十八世紀中頃存在した伊太利のマンドリニストで劇曲作家であつた。千七百六十四年にマンドリン・ヴィルトウオーゾとして巴里に赴いた事が傳へられる。巴里では演奏家とし教師として異常な尊敬をうけたらしい。此人は巴里でマンドリン教則本を著したと云ふ。恐らく千七百七十年頃の事であらうから殊によると此人の教則本が最も古い教則本としての名譽をもつかも知れない。此教則本は當時最も一般的に用ひられたと云ふ。彼は劇曲作家として諸種の作品を公にした。

アレクザンドロ・マリー・アントアーヌ・フリゼリ(又はフリゼル)(Alexandro Marie Antoine Frideri 又は Frier)は千七百四十一年伊太利ヴェローナに生れ千八百十九年白耳義アントワープに死んだヴァイオリニスト、オーガニスト、兼作曲家であるが又マンドリン奏者としても名があつた。そして彼は盲目であつたがタルティーニのコンチエルトも當時の不完全なマンドリンで奏する程の技能をもつて居た。二十四歳の時歐洲の各地を旅行し北部伊太利、中部佛蘭西等に喝采を博した。然し彼の故國たる伊太利ではマンドリンが歓迎されぬ爲、専らヴァイオリニストとして活躍した。彼はマンドリンの六つのソナタを作曲し千七百七十一年巴里で出版した。此他にもマンドリンの作曲はヴァイオリンの作曲と共に可成りにあつた。注意すべき事はジュゼッペ・ベルレンギが「ヴェニス」の變奏曲を此フリゼリに「デイクート」した事である。(因に此人の名は純粹の伊太利名でない。伊太利名であるのを外國讀みに綴つたものか、又は外國名が本名であるか稍疑問がある。)

フェデリゴ・ブルンスウキツク・フィオリロ(Federigo Brunswick Fiorillo)は千

七百五十二年獨逸に生る。千八百二十三年頃まで巴里に住む。最初はヴァイオリンを學び後マンドリン奏者となつた。マンドリニストとして歐洲の各王室に屢々出入したと云ふ。然し當時のマンドリンが可能範圍に於て足りなかつたために彼の心はヴァイオリン、ヴィオラ等に傾いて行つたと傳へられる。

バルトロメオ・ポルトラツツイ (Bartolomeo Portolazzi) は千七百七十三年伊太利ヴェネツィアに生れた。ギター及マンドリンを奏し、ギター教則本、マンドリン教則本等の著書がある。マンドリン教則本は千八百五年ライプツヒのブライトコフ・ハルテルから出版されたものでヴァイオリンのシステムによつて書かれた。其第一章はリウートを初めミラノ風、クレモナ風、ナポリ風の諸種のマンドリンに就いて詳述して居る。此他にマンドリン及ギターの變奏曲(作品第八)をブライトコフ、及維納のカツビより、マンドリン及ピアノのソナタ(作品第九)をブライトコフより出版した。此他マンドリン及ギターの六主題と變奏曲(作品第十)の作があるが其後は多

くギターの作曲に従事したと云はれる。

ニューリング (Neuling) は十九世紀初めに維納に住んだマンドリニストである。そしてマンドリン及ピアノの「ト調のソナタ」によつて名がある。

ウエンゼル・クルムホルツ (Wenzel Krumpholz) は獨逸に生れた。(一七五〇—一八一七)ベートーフエンと交はり彼にマンドリンの美しさを傳へた。其弟であるヨハン・バプタイスト・クシャルツ (Johann Baptist Kucharz) (一七五二—一八二九) はモツァルトと親交がありモツァルトの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」が初演された時マンドリンパートを奏した。此二人共優れた奏者であつたと云はれる。

十九世紀の初期維納にアイヘルベルグ (Aichelberg) と云ふ奏者が居りマンドリンとギターの變奏曲などを書いた。

十八世紀から十九世紀の前半期に於て注意すべき事は高名な作曲家が歌劇の管絃樂中にマンドリンを用ひた事である。

千七百八十七年に初演されたサリエーリの「オルムズのアクズル王」、千七百八十七年にモツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」、千七百八十年にバイエルロの「ゼヴィラの理髪師」、千七百四十七年にハンデルの「アレキサンダー・バリュエ」、千七百七十八年にグレトリの「嫉妬深き愛人」等の歌劇の管絃樂中にマンドリンが用ひられた。之等は別冊「樂聖とマンドリンギター」中に詳細記されるから省くが要するに完成前に於ても既にマンドリンが大家達から愛せらるゝだけの或力をもつた事が證據立てられる。

前記の諸教則本は孰れも今日の用には立たない。それは樂器が全く異なつて居り可能範圍が全く相違して居るからである。

要するに十七世紀の初めに生れたマンドリンは十八世紀より十九世紀の初めに於て可成り廣く愛好せられる様に成つたが、然し其可能性の狭少は獨立して偉大な音樂を生むだけの力をもたなかつたのである。

#### 本編 勃 興 期

然るに千八百五十年頃バスクワレ・グイナツチアによつてナポリ風マンドリンに改善の手が加へられマンドリンが完成さるゝに及び茲に初めてマンドリン音樂の新殿堂は建設に着手されたのである。(今迄存在した各種のマンドリン中ではローマ風及ミラノ風のそれが僅に今日も存在するがそれも殆んど衰滅に陥つた。)

千八百六十九年、後に伊太利皇后となられ今日現に皇太后に在す王女マルゲリッタ殿下がペリサリオ・マツテラ (Belisario Mattered) の教授の下にマンドリンの練習を初められた。此事は明にマンドリンにとつて一大光榮であり一大幸福であつた。之によつてマンドリンの流行は一時に勃發し上下舉つてマンドリンを手にするに到つたのである。伊太利のヴァイオリン教授は之が爲に生活をあびやかされ急にマンドリンを手にして速成マンドリン教授の看板を掲げた喜劇も見られた。

此頃のマンドリン奏者、マンドリン曲作家、マンドリン樂研究者として知られたものはジエゼッポ・ブランツオリ (Giuseppe Branzoli)、ジエゼッポ・ブルランギ (Giuseppe Bellenghi)、カルロ・ムニエル (Carlo Munier)、カルロ・グラツィアーニ・ワルター (Carlo Graziani-Walter)、フェルディナンド・クリストファロ (Ferdinando de-Cristofaro)、リツカルド・マティーニ (Riccardo Matini)、ルイージ・ロアンキ (Luigi Bianchi)、ピエトロ・アルマニーニ (Pietro Armanini) 等であつて此内奏者としてはクリストファロを最初のヴィルトウオーズとしてピアンキ・ムニエル之に續いた。マンドリン合奏も必然の結果として現はれた。勿論此當時には各樂器の編成も今日程完成しては居なかつたのでマンドリンにしても新らしきナポリ風マンドリンの外ミラノ風マンドリンも交つて居た。

現伊太利皇帝ヴイツトリオ・エマヌエーレ三世陛下が誕生の千八百七十年ナポリに開かれた博覽會には初めて百人以上の大合奏が行はれたが此時の成功は又新にマンドリン流行の基をなした。

クリストファロは奏者としては明に最初の名手たる榮譽をもちウオースコール (Wauscall) に於て合奏を指揮した時の如きは非常な注意をひいた。彼は作曲もなしたがそれは充分マンドリンの力を發揮し得るものではない。唯彼が公にした教則本は今日も尙優秀なるものゝ一つとして愛用せられて居る。

ピアンキは全然奏者であつて其技能はムニエル以上と噂される。後にムニエルの四部合奏團の一員として活動した。

ムニエルは云ふ迄もなくマンドリン音樂の父と云ひ得る。

彼の作品は眞にマンドリンに生命を與へた。勿論今日よりして之を見ればあまりに古典的な感じがないでもないが彼の努力が今日マンドリンを斯くまでに向上せしめた事に思ひ到れば彼の大業たる、明かに永世に朽ちざるものと云ひ得る。然し當時は未だ一介の書生として認められたに過ぎない。

マテイーニは功勞者である。彼は後に組織せられた皇后マルゲリータ陛下合奏團 (Circolo Reale "Regina Margherita) の指揮者となつた。

フランツオリとベルレンギは共に作曲方面に努力した。彼等は純粹のマンドリニストとは云ひ得ないがマンドリニ音樂の建設者としてはクリストファロ・ムニエルと共に勃興時の四大家として認められる。

此外研究家乃至教授者としてジエゼッパ・シルヴェストリ (Giuseppe Silvestri)・カルミネ・ド・ローレンティス (Carmine de Laurentis)・ラッファエーレ・ガウディエーリ (Raffaele Gaudieri)・アキッレ・ダムプロシオ (Achille d' Ambrosio)・フエルデニナント・ビデーリ (Ferdinando Bideri)・フランチェスコ・ヂルラ・ローザ (Francesco della Rosa)・ジャンナロ・ヴォルペ (Gennaro Volpe)・サルヴァトーレ・ジャンパニノイ (Salvatore Giandolfi)・アルベルト・トラントアーノ (Alberto Trantano) 等を擧げ得る。

ローレンティスは千八百六十九年完成後のマンドリニに對して初めて教則本を著はした。而して其數十版は瞬く間に賣れ盡す盛況を呈したが然し後にクリストファロ・ベルレンギ、ムニエル等が優秀なものを公にしたので今の用には成らぬのである。然し此教則本がクレモナのマンドリニスト、エツフェ・サッキ (F. Sacchi) によつて英語に譯されて倫敦に出版され英皇室のヴィクトリア、及モード・オブ・ウエールス等の王女殿下のマンドリニ習學の用に立つた事は彼の名譽である。又ローレンティスはムニエルにマンドリニを教へた事によつて異常の光榮を有した。ダムプロジオは今日のマンドラの創製者として知られる。シルヴェストリは多作家で作品數百に上つたと云ふ。

ダムニエルは漸く頭角を現はし初めた。千八百八十四年にはフイレンツェに獨立のマンドリニ音樂學校を建て、直接に後進を導く外、教則本、獨奏曲、二部曲等を公にした。



マンドリン合奏の勃興につれ茲に此合奏用の獨創的な曲があらはれる様に成つた。合奏曲の作家としてはベルレンギ、ブランツオリ、グラツイアーニ、ワルテル等が優れて居る。又マンドリン完成以來ヴァイオリン曲をマンドリンで獨奏する事が一時盛んになつたが然し結局マンドリン獨奏用としてはオリヂナルに作曲する事の必要を感じデ・クリストファロ、ムニエルの二人は所謂マンドリンの爲の獨奏曲を作り初めた。而してデ・クリストファロは充分にマンドリンの力を發揮せしめ得なかつたがムニエルの大手腕は遂に之に成功したのである。

マンドリンコンサートは到る處に開かれた。而して其最初のものはデ・クリストファロ、ムニエル、ダムプロジオ、マツテーラの四人によつて企てられたと云はれる。

マンドリン音樂の勃興につれ新しい名手が輩出した。エルネスト・ロツコ (Ernesto Rocco)、ニコロ・カラッチェ (Nicolo Calace)、ラツファエーレ・カラッチェ (Raffaele Calace)、エドゥアルド・メツツァカーボ (Eduard Mezzacapo)、ジトギンツ・シツタイネ (Giuseppe Pettine)、ステラルリオ・カムブリア (Stellario Cambria)、ベラント・オ・スカルツィ (Gregorio Scalzì)、ローラン・ファンタウツィ (Laurent Fantauzzi)、エルネスト・コツタン (Ernesto Cottin) 等が即ちそれであつて彼等の激湧たる生氣はムニエルの大業を更に偉大ならしむる事を期待させた。

之より曩きマンドリン及其音樂は早くも他國へ紹介され初めた。先づカミルロ・ピゾーネ (Camillo Pizone) は南米ヅエノスアイレスに移住して教授兼獨奏家として名を得、デ・クリストファロとシルヴェストリは協力して巴里に教授所を興した。此外フランチア (L. Francia) は倫敦に、サンタクロッチェ (Santacroce) は露西亞に赴いたと云はれるが明瞭でない。

マンドリン合奏團は各所に起つた。そして千八百九十二年デエノヅに博覽會が開催せらるゝに及び之を機としてマンドリン合奏團獨奏者の最初の國際コンクール

(競演會)が開かれたためにマンドリン合奏は急激に發達した。此コンコルソに於てムニエルは獨奏者とし且作曲家として金牌と賞状を得て一躍名を擧げたのである。

千八百九十八年ムニエルは第一次の四部合奏團を組織したが此合奏團を目的として獨創的なマンドリン四部曲がムニエルによつて書かれた。マンドリン四部合奏を絃樂四部(ヴァイオリン系四部)に對比して高級に取扱つた嚆矢である。ムニエルの四部曲三つはマンドリン小合奏に於ける至寶であると云つてよい。

要するにムニエルの一生はマンドリン樂勃興史の大半であるから詳細は別冊「大家傳」について見られたい。二十世紀に入つて千九百十一年彼は永眠した。彼の死は明にマンドリン史に一區劃を與へた。そして之よりして伊太利のマンドリン音樂は稍沈傾に陥る事を餘儀なくされたのである。若しマンドリン音樂の勃興期を更に二期に分つならば明に此千九百十一年を界とすべきである。之以後は眞の現

代である。

曩きに記した名手の中ベツテイネ、カムブリア、スカルツイの三人は夙に北米に去り、ファンタウツツイ、ユツタンは佛國に定住し、メツツアカーボも亦後に佛國に移つた。而して伊太利に残つたロツコは唯一無二の名手と云はれたが早く財を得て斯界から遠去かつてしまつたのである。

彼等の移住は勿論一面に於て伊太利の斯界を寂寞たらしめたが、然し又他面に於てはマンドリン音樂を他國に紹介するの意味に於て成功したと云はなければ成らない。而して佛、獨、瑞西等の各國は伊太利にも近い關係から其傳播の速かなる事も直ちに首肯出来るが米國の隆盛は寧ろ奇異に感ずる人も多からう。

元來米國人の性質は珍奇を尊び流行を逐ふに違なしと云ふ事が出来る。彼等は新らしきものに對しては極端に之を喜び之を容れるが然し又之を見棄てる事も頗る速やかである。西班牙學生のバンドウリア合奏團から變態的にマンドリンを受け入れ

た彼は直ちに之に心酔し朝も夕も只マンドリンを弾奏すると云ふ状態を現出した。

従つて米國のマンドリン界は一時世界の斯界を風靡するかの概があつた。ペツテ  
イネ、カムブリア等を初め、米國に生れたマンドリニスト、ヴァレンティン・アプト  
(Valentin Abt)、サミュエル・シーゲル(Samuel Siegel)、ウキリアム・ブレース(William  
Place)等の活躍は目覚ましきものであり又各都市に起つた合奏團の活動も怖るべき  
ものであつた。米國の斯界は實に千八百九十六年から千九百十五六年迄の二十ケ  
年間を隆盛期と云ひ得る。而も今日の米國は早くもマンドリン音楽に飽き初めた。

一時世界一のマンドリン國たらんとした勢は今や何處にも認められない。  
斯くして世界大戦後の状況はやはり伊太利を中心として佛、獨、瑞西等に力が集  
つて居るが而も昔時の隆盛を再び繰返すや否やは甚疑問であると云はなければ成ら  
ない。然し必ずしも吾々は前途を悲觀する必要はない。何となればマンドリンの音  
樂はムニエル時代の古典的から漸次近代的に移らうとして居るからである。そして

吾々日本人として特に喜ふべきは我邦斯界が演奏方面に於て今や最有力なマンドリ  
ン國たらんとして居る事である。

今日の世界斯界を大觀して私達は次の如きマンドリニストを見出す。

伊。カラーチエ(ラツファエーレ)

米。ペツテイネ、ブレース、カムブリア、シーゲル

佛。ファンタウツツイ、メツツアカーボ

白。ラニエーリ(伊太利人なるも現在白耳義に住む)

希。ドウニス

此他に伊にロツコ、米にアプト等もあつたが今日では全く隠れて仕舞つて居る事  
は前に記した通りで殊に大戰に出て一腕に負傷したと云はれる。

茲で私は簡單にムニエル時代の古典的マンドリン曲作家と今日の近代的マンドリ  
ン曲作家とを比較したい。

ムニエルは多くの獨奏曲と三つの四部曲とに生命の全部をもつて居る。彼の作品は温雅な資性を其儘に發露させ従つて何人にも一樣に愛好せられるが彼の不遇な境環は彼に充分力を發揮せしめなかつた恨がある。殊に合奏曲作家として力がない。デ・クリストファロはムニエルよりも先輩であり従つて其作品はムニエルのそれよりも單純である。ブランツオリには合奏曲に於て「望まれし日」の如き力ある作品をもつて居るが一般的に觀察すれば彼も亦最も古典的な作家であると言はなければ成らない。ペルレンギには大曲はない。そして作品は可成り平凡である。グラツィアーニ・ワルテルは「ダンテとベアトリーチェ」に氣をはいたが彼はあまりに情的な作家である。チー・アー・ブラツコ(C. A. Bracco)なる作家は小交響樂「マンドリンの群」を書いて古典的作品中に一石を投じたが之とて古典樂の域を脱したとは云はれない。而して彼等はデ・クリストファロ、ムニエルを除いて獨奏曲に對する研究が全く足りなかつたと云はれなければ成らない。メツツァカーボは今日も生存して居

り且其「アンダンテとポロネーズ」の如きは傑作であるが明に其作風は古典的であり、ファンタウツイも亦「黎明」の名作をもつが近代樂家ではない。

然るに獨奏曲に對するカライチエ、ラニエーリ、合奏曲に對するラウダス、ファルボ等は全然古典樂派に見られないものをマンドリンに與へた。

稍岐路に入るがマンドリンの古典樂と近代樂とは如何にして現はれたかと云ふ事を茲に述べて置く。古典的作家はマンドリンと云ふ樂器を其音色よりして繊細幽艶な感情的音樂に適すると考へ、若しくは其樂器の發音の性質よりして輕快飄逸な舞踊音樂にふさはしいと考へて居る。(此考察は今日も尙多數の人々からもたれて居る)然るに近代的作家はマンドリンの能力が決して如上の範圍に限定されるものでなく更に廣く大きく且自由なる天地をもつ事を信じ之を實現せんとしたのである。

今古今のマンドリン曲作家について古典的樂曲作家と近代的樂曲作家と此中間を

行く中庸作家とを區別するならば次の如き分類表が作られる。

A、古典的樂曲作家。

獨奏曲。クリストファロ、ムニエル(過去)ファンタウツツイ、ブレース

(現在)

合奏曲。グラツイアーニ・ワルテル、プランツオリ、ベルレンギ、ブラツ

コ(過去)メツツアカーボ(現在)

B、中庸作家。

獨奏曲。シーゲル、カムブリア、ペツタイネ、ドウニス(現在)

合奏曲。マネンテ、カンナ、マツサ、ラヴイトラーノ、アマデイ(現在)

C、近代的樂曲作家。

獨奏曲。カラーチエ、ラニエーリ(現在)

合奏曲。ファルボ、ラウダス、ボツタキアーリ(現在)

勿論斯くの如き分類は嚴格にあてはめ得べきものでもなく且又一人の作家についても作品の各々によつて多少差異があつて一様には云へないものである。例へばラウダスについても或ものは寧ろ古典的な色彩を豊かにもつて居り、カラーチエでさへ或ものには(殊に初期の作品には)近代的作風が認められない。

若し彼等近代的樂曲作家の作品を仔細に研究するならば識者は必ず古典的樂曲作家の作品に見る事を得なかつた音と形と力とを見出すであらう。

然し私は古典的樂曲が不可で近代的樂曲が可なりと云ふが如き暴論をはくものではない。古典的樂曲には古典的樂曲としての本領が存し近代的樂曲には近代的樂曲としての本領がある事は改めて書く迄もない。之はあらゆる研究家が充分心しなければ成らぬ事である。とは云へ近代的樂曲作家が古典的樂曲作家の建設したマンドリン樂の殿堂を更に擴大した事、及び近代人が漸次近代的樂曲に心を傾ける事は必然の結果であると云はなければ成らない。

ジヤチント・ラヴィトラノ (Giacinto Lavitrano) の「ローラ」ニコロ・マツサ (Nicolo Massa) の「日光と戀愛」等に於て稍窮屈に不器用に示された革新のひらめきはウーゴ・ボッタツキアーリ (Ugo Bottacchiar) の「交響的前奏曲」、ニコロ・ラウダス (Nicolo Landas) の「序樂詩」「希臘風主題に據れる序樂」「サルヴァトーレ・ファルボ (Salvatore Falbo) の「西班牙」「田園寫景」等に於て新に洗練されて現はれる様に成つた。清新な手法、壯大な力、完成された和音は見るからに聞くからに心強い。

アメデオ・アマデーイ (Amedeo Amadei) の「船人の組曲」カミーユ・カンナ (Camille Canas) の「村祭」ジュゼッペ・マネンテ (Giuseppe Manente) の「メリアの平原に立ちて」等もグラツイアーニ・ワルテル、ブランツオリ等の作品に比すれば明に近代的傾向を豊かにもつて居る。そして「ローラ」や「月光と戀愛」に見る様な露骨な超脱的気分が見られないだけそれだけアマデーイ等はマツサやラヴィトラノ等に比して作家としての手腕が上位にある事を首肯させる。

私は今後の合奏曲がファルボ、ラウダスの二人によつて新天地を開かれて行く事を信ずるものである。而して同時にアマデーイとボッタツキアーリにも新らしい力を示す事を期待して止まない。

獨奏曲作家を後廻しにしたのは奏者としての批判を同時に行ひたいと考へたからである。既に表中で見られた通り現在の獨奏曲作家は同時に獨奏家として知られたものゝみである。

ファンタウツツイは今尙作品を公にして居るがそれは彼が雑誌「ル・プレクトル」を經營して居る爲に止むなく筆を執つて居るかの感がある。事實近來大曲は一つも現はれない。而して奏者としては全く沈黙に陥つて仕舞つたのは惜しむべきである。私は彼が單に出版業としての營利的方面にのみ頭を用ひず作家として彼の名を不朽にする立派なものを著す事を希望する。メツツアカーボは巴里にあつて氣の毒な境遇に居る。彼には今後の活動は殆んど望まれない。米國のシーゲルは嘗つて

自ら世界一のマンドリニストなりと揚言し又實際マンドリン奏者としての技能は確に注目に値ひしたが彼の不純な氣持は其後何等の發達を示さない。彼は數種のマンドリン獨奏曲を公にした。孰れも多大の技巧を要求するものであるが内容はあまり多くを期待し得ない。ブレースはシーゲルと異り演奏も作品も皆感情的である。従つて旋律については多能な彼も和音には甚だ淺薄な手腕しかもつて居ない。彼には作家としてよりも奏者として一層の努力を望みたい。

カムブリアとペツタイネとは伊太利を祖國としただけにシーゲルやブレースよりもすべてに眞摯な態度が見られる。カムブリアは其の剛放な氣概に於てペツタイネを凌ぎ其マンドリン、マンドラ、マンドロンチエロの三部曲を初め數種の獨奏曲に其後の奮闘を期待されたが今日の狀勢では期待に添はない。ペツタイネはカムブリアよりも器用な作家である。然し彼の司伴樂は傑作であると同時に彼の銜氣を暴露した。器用な彼は必然的に早くから米國斯界の不純味を解して自から之に入つて

行つた。私は彼が伊太利から米國に渡つた事を呉々も口惜しく思ふ。カムブリア、ペツタイネともマンドリニストとしての手腕は充分認められるが近來殆んど沈黙して居るのは奇怪である。

伊太利に於て數年前最も期待されたのはシルヴィオ・ラニエリ (Silvio Ranieri) である。彼は若き天才で其潑刺たる生氣は必ず將來の斯界を左右するであらうと思はれたが司伴樂と數葉の獨奏曲に天賦の才の片鱗を示した儘白耳義に移つて行つた。希臘の天才デメトリウス・シー・ドウニス (Demetrius C. Doumis) はラニエリよりも尙幼くして名をなした。彼が水兵服をまどつて米國の斯界に打つて出でた時、米國人は其技能に舌を卷いた。彼は今年二十九歳、作家としては小曲ながら「東洋の夢」其他を出して郷土的感情を巧みに表示した。

カラーチエは今日の第一人者であり、昔時のムニエルと好對照をなして居る。マンドリンヴァルトウオーゾ、リウートの名手として演奏方面に他の追従を許さぬの

みならず作家としては近來益々圓熟の境に入り其作品は一として凡ならざるはない。今や彼の地位は二十有餘年前の斯界に於けるムニエルのそれに近い事を想はせる。古典樂に於けるムニエル、近代樂に於けるカラーチエは共にマンドリン界に永久の明星として傳へられるであらう。(而もカラーチエは一面カラーチエ樂器製造所の主として世界一のマンドリンを斯界に與へ一層の貢獻をなして居るのである。)

此稿を終るに當りカラーチエ、フアルボ、ラウダス、ドウニス、ラニエーリ、ボツタツキアーリ、アマデイの諸家に一層の奮勵を望んで止まない。

(因に十九世紀の後半期以後、即ちナポリ風マンドリンが完成された後に高名な作曲家でマンドリンを取扱つたものではグエルデイが千八百八十七年初演の「オテロ」に、スピネルリが千八百九十四年「南方の港にて」に、近くはグスターフ・シヤルバン・テイエーが千九百年「ルイゼ」に於ける例があり、又歌劇にはないがマーラーが

二つの交響樂にマンドリンとギターとを使用し又グレーションジャーマンも之を用ひた。然し惜しむらくは彼等の多くはマンドリンを眞個に理解して居ない。従つて其使用は決して上乘の効果を擧げては居ないのである。敢て讀者諸氏の御參考迄に記して置く。)